

名古屋市

西部地域療育センターだより

No. 12

正面壁画「友情」より

新年度を迎えて

所長 鷺見 聡

今年も、桜の花は一気に満開となつてすぐに散り、桜の季節はあっという間に終わりました。昔から桜に関する歌は多かったですが、最近の若者の間でも桜に関する歌がヒットしているようで、やはりこの季節は日本人にとっては最も印象的な季節のようです。

西部地域療育センターでは、4月に初めて集団に参加したり、新しいグループ(クラス)に移ったお子さんが多く、新しいお友達や新しい先生とのたくさんの出会いがあったと思います。お子さんたちは、最初の頃は緊張感を持って通所していたようですが、5月～6月になるにつれ、少しずつ新しい環境になれ、ちょっと余裕が生まれてきたところと思います。

一方、センターのスタッフの多くは昨年度と同じメンバーですが、4月からは何人かの新しいメンバーを迎えました。子供たちと同じく、スタッフもいろいろな個性を持つ人たちですが、以下のような共通の理念(抜粋)のもとに仕事に取り組んでいます。

1 生命の尊厳 子どもたちの生命をかけたがえの

ない存在として尊びます。

2 個人の尊厳 子どもたちの個性、主体性、可能性を大切にします。

3 人権の擁護 差別、虐待、人権の侵害を許さず、人としての権利を擁護します。

4 社会への参加 子どもたちが、社会の中で有意義な生活が送れるように支援します。

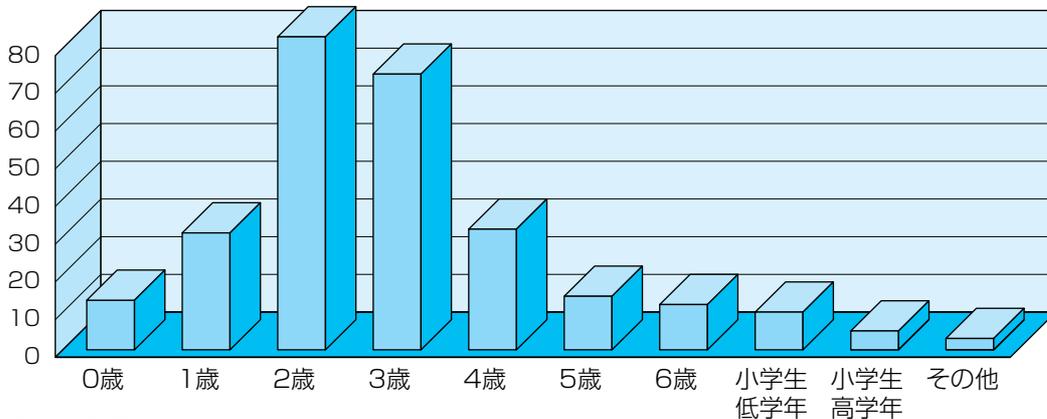
5 プライバシーの保護 職務上知りえた個人情報(プライバシー)を漏らしません。

6 支援者としての自覚 役割と使命を自覚し、専門的知識・技術をもって支援します。

年々療育センターを利用されるお子さんの数が増加して、センターへの期待も大きくなってきました。限られた人数のスタッフでセンターの役割を果たすには、地域の様々な方々(ご家族、保育園、幼稚園、学校、保健所、病院など)との連携が益々重要になると考えております。今年度もよろしくお祈いします。

平成16年度新規相談の概要(1)

年齢別新規相談件数



総件数
256件

■年齢別新規相談件数

(単位:件)

区	就学前児童						小学生		その他	計	
	0歳	1歳	2歳	3歳	4歳	5歳	6歳	低学年			高学年
計	11	29	81	71	30	12	10	8	3	1	256

特集 西部地域療育センター連続講座

西部地域療育センターでは、地域の保育園、幼稚園、学校、保健所、療育関係者やボランティアの方々と地域療育に関するさまざまな課題について考える機会とするため、毎年度、連続講座を開催しています。地域療育体制の充実とネットワークの形成にお役に立つことができれば幸いです。



平成16年度第3回 西部地域療育センター連続講座

— 障害児と虐待 —

平成16年12月10日 講師 名古屋市児童福祉センター 牧野恵之ケースワーカー

児童福祉センターの牧野と申します。名古屋児相の場合、健常児と障害児の相談が分かれていて、私は、障害児のケースワーカーになります。現在、児童相談所では児童虐待が一番大きな課題としてあるのですが、障害児の場合、虐待相談もはじめから私の係で対応しています。障害児の虐待の数は総数としては（比率的にはわかりませんが）少なく、特に通告の数は健常の子どもに比べると非常に少ないわけです。これは、障害児の虐待が少ないというより、療育システムにフォローされることが多く、その関わりの中で、虐待という認識ではなくて、家庭の問題や受け止めの問題などで既にフォローされている場合が多く、虐待という認識を改めてする必要がないからではと思っています。

少し、児童虐待について話をすると、今日も、出てくるときに立ち入り調査に出かける前に出くわしました。クーハンを持って出勤するというものものしいものでした。本当に相談課（健常児の相談窓口）は近くにいても大変そうです。

昨今、児童虐待で言われているのが、介入型のケースワークの重要性です。特に、親と関わらず、子どもが著しく危ない状態が予想される際に、司法を関与させて、親権にしばられず児相の行為に正当性を与えようというものです。子どもの保護をしやすくするための手法です。よく話題になるのは、28条申し立てとあって、児童虐待の事実を巡って、親が施設入所に反対、児相は施設入所妥当と判断が分かれたときに、家庭裁判所に申し立てができる仕組みがあります。裁判なのでそれ相応の客観材料がいるのですが、司法を使うことによって、子どもの権利侵害を直接的に争点にできます。以前のように親との関係だけを重視して、なかなか子どもの話に至ら

ないという状況はなくなるので、子どもの状態が危険なら、司法の判断を仰ぐことで分離の正当性を確保できる。しかし、問題はあって、仮に裁判に勝ったとしても、親が強行に子どもを家に連れ帰ったときには、それを止める手立てがどこまで保障されているのかは曖昧なままであること。そもそも、子どもを巡って親が怒るパワーというのは、正直に怖いんです。だから、徹底抗戦してくるような人にでも使えるかになると、難しい面もある。介入という言葉の通り、対親への戦略的な色合いがあって、進行をうまくコントロールできればよいが、そうでないと事態は泥沼化する。これは、親との関係を重視する従来のケースワークとは大分異なっている。ただ、今後、必要な手法であることは間違いなく、どのように消化していくかは、今後の課題だと思います。

私が介入を意識したのは、痛い目にあっているからです。ちょうどワーカー1年目のとき、以前から継続していたケースを引き継ぎました。その家庭は、ゴミだらけ、兄弟3人も不登校。ゴミの量といった桁違いで、衣類の山や何から何までがマンション中にいっぱいという状況でした。もともとゴミがこちらの何とかなる問題と捉えていませんでした。月に1度家庭訪問して母と何時間も玄関先で話をするといい日が続きました。母は、がんこで変わった人でしたが、ある意味とても魅力のある人だったので、色々な話をするほどに、子どものことを愛しているいい人だという思いが強くなります。かなり癖のある人だったので、関係がとれるのは自分だけだという思いもあったかもしれませんが。そのうち、ゴミすら、母の立場からすれば「もの」といった方がよいと真剣に思うほどでした。だから、こちらが考えるゴミ対策も、厄払いとか人形供養とかといったもので、

おおよそ、正気とは思えません。

それでも、母との関係は順調に行き、ショートステイの登録や上の子どもの進学のことなど、ゆっくりではあってもよい方向に向かっているように思っていました。そんな矢先に事態が急変しました。上の兄がゴミの中にうまって死んでしまったのです。非常にショックでした。事故死の扱いになりましたが、見えていなかったものが急に襲い掛かってきた感じでした。今になると、どうしてその状態を見過ごせたのかと思いますが、正直に言えば、そのように思えるようになってきたのは最近のことで、母との関係がよかっただけに、長らく自分の落ち度を認めるのが嫌で、他の方法があるとは考えられませんでした。

この事故の後、他の子どもたちは慌てて施設入所となりました。片付けないかぎり子どもを返せないということ、何時間もかけて納得してもらい、ほとんど裏切り者のような気分で母を説得したのを覚えています。結果的には、ここの一家はバラバラになってしまいました。兄が死に、家族がばらばらになるという結末は、私のなかでは今でも重いままです。これ以降、介入を意識するようになりました。

その後、同じようなゴミの家では清掃するようになりしました。その家庭も、夫婦仲は悪く、家中はすさまじく汚い状況でした。親も子ども不幸そうかといえれば決してそんなことはなくて、夫婦喧嘩はありながらも、子どものことは可愛がっていて、子

もが夫婦をつないでいるような状態でした。それなりに完結した生活を送っていました。しかし、子どもが住むには、常識外れな環境でした。

養育力という点からいえば、子どもを施設入所した方がよいという意見もあったのですが、施設に入れば、帰る場所を無くしてしまうことが目に見えていて、在宅で何とかならないかと模索することにしました。その結論が掃除で、今のままでは子どもの入れる場所ではないと、素直に伝えたくて、父の了承のみで話がどんどん進みました。母は、不満だったと思います。実際、ごみ収集車4回分のごみをだして、父の了承があるとはいえ、強制清掃と大した差はないともいえるわけです。

ただ、そこまですることが親子を信じる面もあって、その後関係が悪くなってしまったかということ、そんなことはありません。自分たちのスタイルをとるか、家庭を維持するかで選択で、親が家庭をとったという祝うべき面が親の方にも本当はあって、単なる介入ではなくて、変化が起こる可能性のあるところが、とてもよいと感じています。ナイーブすぎるかもしれませんが、率直に伝えたあとに起こってくる変化というのは悪いものとは思えません。

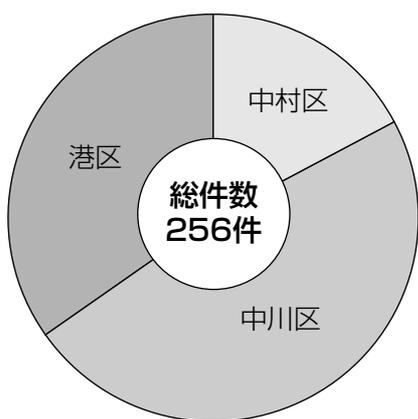
この家庭の場合、自分たちで掃除できるようにはならないですが、以前のように全く孤立していることもなくなりました。今でも、ヘルパーが入る形で家族が成立しています。

さて、ケース会議でもよく議論になるのですが、「こんな養育力のない家庭に育つのは、子どもにとって不幸じゃないか。」という意見に苦慮することがあります。これに対して、児相の牧Drがよくいわれるのは、虐待ケースは孤立しがちな家庭が多いが、関わることで、家庭を支えていくことができるのではと言われることが多い。ネットワークを通じてのキャッチアップ。関わり、関係性のことを言われることが多いです。

個人的にも、同じような感触はあって、関わるかどうかで大分違う様相になる。個人的には、変化が起こるような関わりの必要性を思っています。生活支援の形で関わっていくことが多いのですが、変化になるような事を仕掛ける必要性を感じています。「やっても無駄」「焼け石に水」という反応を押し

平成16年度新規相談の概要(2)

区別新規相談件数



■年齢別・区別新規相談件数

(単位:件)

区	就学前児童						小学生		その他	計	
	0歳	1歳	2歳	3歳	4歳	5歳	6歳	低学年			高学年
中村区	3	4	10	13	6	2	4	1	1		44
中川区	4	14	49	31	11	3	4	5	1	1	123
港区	4	11	22	27	13	7	2	2	1		89
計	11	29	81	71	30	12	10	8	3	1	256

て在宅支援するためには、積極的な意味合いがないと、周囲を納得させきれない面もあります。牧Drが言われるように、「虐待ケースの家庭基盤の根底には生活基盤ができていないという事実がある。子どもを虐待するなという視点だけでは、うまくいかない。生活基盤ごと支えるようなネットワークを作っていくことが必要」というメッセージは、今の児童虐待の流れのなかでは、とても貴重な見方だと感じています。単なる見守りではなく、関われるタイミングを見極めるようなネットワークという感じかなとも思います。

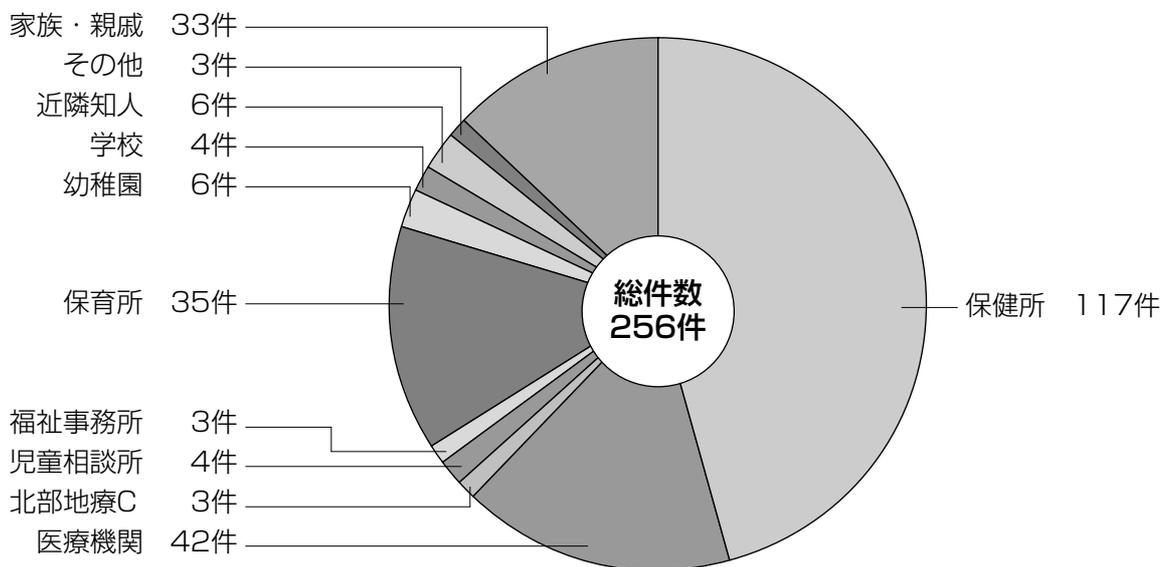
もう一つ個人的な思いとして、「施設」を全面的に肯定しきれないのは、学生時代に通っていた養護施設の子どものことがあります。最初に、紹介するのは施設が大好きな子どもです。彼女は、来家恵美子といって、女子ボクシング初世界チャンピオンでもあります。出会ったときは、小6でした。ちょうど、高校に行かないと中学までしか施設にいれないと分かり始めた頃でした。男みたいに遊び、スカートを嫌がり、毎日が楽しそうでした。勉強の出来なさ加減は見たこともないほどで、太陽が沈むので海は沸騰しているなど本気で言われると、原始人に教えているのではと思ったほどでした。逸話はいくらでもあるのですが、とにかく、毎日、ボランティアに電話をし、ボラをキープして、それこそ机の前に何時間でも座っていました。ほとんど、何も理解していないのだけれど、スポーツのように座りつづけていたのは、すごいことだったと思います。そんな生活を延々続けて、結果的には高校を卒業して、昼は紡績工、夜は短大というハードな生活を経て、歯科衛生士になるのですが、1ヶ月でやめてしまいます。そこで、ボクシングに出会い、とんとん拍子で世界チャンピオンになります。私は、小6から高校卒業するくらいまで知っているのですが、いつみても、

彼女は幸せそうでした。わがままなくらい楽しくやっていたわけで、光を歩いてきたように思います。彼女は、親を嫌いと言っていたのですが、今回、自伝がでて、親のことを詳しく知ると、今の基準なら、虐待に当たるようなこともされていたようです。継父がすぐ怒る人だったようです。それでも、今回アエラの記事にあったのですが、「親のことを悪く言われるのは嫌」と語っています。彼女にして、親の問題は大きいのだと思います。親の問題をあれほど感じさせない子どもは他にはいなかったです。実際、彼女も色々な問題を抱えているようなのですが、仮にどうなるろうとも、とにかく、幸せそうにみえていたということはかけがえのないものとして、私のなかに残っています。そして、私の中に彼女が残っているということを、彼女の方でもきっと疑わなと思います。依存と紙一重なのに、彼女が違うところは、関わった人から愛情をもらえたと感じていそうところが、彼女のすごい所だと思います。また、応援して下さい。

そう思うと、他の子どもたちは多かれ少なかれ親の問題が見え隠れしていました。施設の中でも外でも暴れただけ暴れて、皆から嫌われていた男の子が、中卒で施設をでる3月になって突然、15年ぶりに出てきた母の存在にニコニコとしていた顔が忘れられません。その後、3週間だけ母の家にいた彼は、家出をして、しばらくチャンピオをしていたらしいのですが、いまどこで何をしているのか、わかりません。彼にまつわる話では、他の子へのいじめがひどくて、その罰として職員、施設の子全員で彼を取り囲み、それぞれが「嫌い」「死ね」などと言いつけたことがありました。そのときは、彼も泣いていたようですが、彼の行為が収まることもありませんでした。逆に、子どもたちが何をしだしたかといえば、少し気に入らない職員を呼び出し、取り囲み同じよ

平成16年度新規相談の概要(3)

紹介経路別新規相談件数



うに文句を言うということをやるとなりました。ちょうど施設が混乱していて、長くいた職員が次から次に辞めていった時期でした。施設というのは難しいところだと思います。

決して、この施設は悪い所ではなかったです。私にとっては、この施設がなければ人生途方に暮れていたに違いなく、感謝と懐かしさばかりです。この施設の良いところは、元園児と元職員と元ボラがOB会と称して集まれる場があることです。先日は、来家が京都で試合をしたので、その時もありました。「(通告を受け)家庭訪問に来たケースワーカーの態度が悪い。担当を変えてくれ」と元ボラであり、京都児相のワーカーである後輩に訴えていたり、「事故の示談に入ったろか」と眼光するどく語る元子どもの姿は、何はともあれ生きてきて集まれる喜びみたいなものがあって、それはこちらと同じようなものと集まれることに喜びがありました。

40近くなった卒園生の一人が「悪いことをやりつくして、今では17歳の子どもを持つ主婦してまーす」とうれしそうに叫んでいた姿が印象的で、結婚して、子どもがいることが成功者として、堂々と通じる場面に久々に出会いました。それほど、子どもたちにとって家庭像というのは大切なものだと思います。

その家庭がどんな家庭であっても、子どもからみれば家庭はかけがえのない居場所であるということは忘れてはいけないことなのだと感じています。往々にしてケースワーカーをしていると、親との間だけで施設入所が決まっていて、子どもに選択権がないということも多いです。特に、養護ケースや虐待ケースではその傾向が強いです。「生活が整うまで子どもを預かって欲しい」「この子が嫌いだから預かって」と言われて、いつの間にか子どもが施設に行き、そのままずっとということも多いです。特に、障害児の場合、一度施設に入ると、なかなか家には戻れない現実があります。その結果、障害児施設は大人ばかりになっています。だから、親から入所の相談があっても、簡単に「はいそうですか」とは言えないわけです。それは、虐待の場合でも同じで、できるだけ在宅で何とかならないかと真剣に考えることになります。ワーカーにとって入れる施設がないというのは本当に大変なことです。口だけが頼りとなって、親に何を言うかということがプレッシャーになります。そういう時には、こちらからはこう見えるということ、どのレベルで伝えるかということが重要になります。

例えば、嚥下障害があって、チューブで栄養補給している子供の体重が下がって、命の問題になりました。病院から親が栄養補給を怠っているのではないかと通告があがりました。当然、関係者からは施設入所を求める声が強かったのですが、幸い、主治医が在宅で何とかするのはと主張できるだけの関

係を保護者と持っていたことがとても大きかった。だから、こちらが考えたのは、訪問看護やヘルパーを入れる体制を作ることを目指しました。後ろ盾があったこともあって、「今の体重は、危機的。このままでは大変なことになるので、児相としても、どの位栄養補給されているかを客観的に知りたい。」と親に話すことができました。何もなければ、もう少しトーンを下げた言い方になるか、無謀に「あなたのやっていることは虐待だ」と言っていたかもしれません。それを思うと、直接的で効果がありました。虐待の場合、こちらのメッセージは、「あなたが本当に何をしているのかみせて」ということだと思いますが、こんなことは、普通は言えません。それが効果を持つてくるのは、親の方でも虐待が悪いと意識していればこそという面があります。

これは、ワーカーにとっては重荷で、立入るという姿勢と他人と接するというバランスを求められるからです。正直、逃げたくなるような時もあります。そんな風なので、先がうまくいくかどうかは、その時に何を話すかにかかってくると思えてくるわけです。そんなときに、関係者がこの家庭は何とかなるという思いをもっているかどうかで、幸福なネットワークがあるかどうかで、家族の行方がどうなるかも左右されます。つまり、在宅か施設かの分かれ目のようなものです。これほど孤独感を感じなかったケースはありませんでした。ネットワークに支えられていると思えました。とは言っても、実際に地域が支えるというのはものすごく大変なことは事実です。どのようにしていくのがよいのかは、手探りのままです。理想をいえば、ボランティアや色々なインフォーマルな支援ができていくといいなと思うのですが、そううまくはいきません。

最近読んだベテルの家の向谷地さんの言葉が新鮮でした。「私たちが人を信じるとか尊重するというのは、『やけくそで信じる』『悪いけどこっちは勝手に信じちゃっているからね』とポケットに入っているものを『はい』と手渡すような感覚。その方が役にたつ。あまり美しい物語にしないのが、べてる流です」

こういう支えられ方の方が幸せなのだろうと思っています。色々問題はあっても、まあなんとかなっている位がちょうどいいのかもしれませんが。実際には、在宅でやっていくにも課題はいっぱいあるわけだけれど、安易に施設というのも弊害が大きくて、個人的には、出来るだけ施設に入らないように粘るとか、家庭を潰さないようにするとか、そんな思いを持って家族に関わるのが大切なのかなと思っています。牧Drが言われるように、虐待ケースの大半は支援があれば何とかなる可能性があるという指摘を思えば、在宅で何とかなるケースを何とか支えていくことを続けることで、幸福なネットワークができてくるのではと楽観的に思っています。

平成17年度 西部地域療育センター連続講座のご案内

第1回 講演会 テーマ「先天性疾患と発達障害」

講師 西部地域療育センター所長 鷲見 聡 (小児科医)
日時 平成17年7月8日(金) PM3:30~5:00
会場 西部地域療育センター1階 多目的ホール
対象 保育園、幼稚園、小学校、療育施設、関係機関の職員のかた

第2回 通園部一日体験

日時 ①平成17年8月22日(月) AM9:00~PM5:00
②平成17年8月23日(火) AM9:00~PM5:00
③平成17年8月25日(木) AM9:00~PM5:00
④平成17年8月26日(金) AM9:00~PM5:00
会場 西部地域療育センター内通園部「キララ」
対象 民間保育園・幼稚園の職員のかた

療育グループ体験

日時 ①平成17年7月20日(水) AM9:00~12:00
②平成17年7月21日(木) AM9:00~12:00
③平成17年7月25日(月) AM9:00~12:00
会場 西部地域療育センター療育グループ
対象 民間保育園・幼稚園の職員のかた

第3回 講演会

日時、内容未定 (秋頃の予定)

ボランティア募集

保育場面での手助け(室内の活動、園外への散歩など)
教材づくり
保護者活動時における療育児のきょうだいの保育
センター行事(運動会、夏祭りなど)のお手伝い
その他、園の環境整備など

■お問合せ・お申込み■

名古屋市西部地域療育センター